古老茶話＝柏崎永以
秉燭譚＝伊藤東涯
四方の硯＝畑維竜

# 日本随筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成　第一期　第六巻
昭和二年九月廿八日発行
編纂者　日本随筆大成編輯部
代表　早川純三郎
発行者　吉川半七
発行所　日本随筆大成刊行会

日本随筆大成
〈第一期〉11
昭和五十年十月二十日　印刷
昭和五十年十一月十日　発行
編　者　日本随筆大成編輯部
発行者　吉川圭三
発行所　株式会社　吉川弘文館
〒113　東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三―九一五一〈代表〉
振替口座東京二四四番
製　作　株式会社　たんちょう社

# 解　題

本書には、古老茶話、秉燭譚、四方の硯の三種を収める。

## 古老茶話　三巻

柏崎永以（かしわざきえい）著

本書は主として、戦国時代末期頃から、江戸中期頃までの武家事蹟及び其らの言行逸事などを、見聞に従って記したもので、時代の前後など関係なく、其の書留を一応整理してまとめたような所もあるが、一面、一つ一つ切っても読み進めるので、気楽に通読も出来る書である。内容も豊富で著者の博識を思わせる。何時本書が草せられたであろうか、時代ははっきりしないが、年号の出て来る一例を挙げると、慶長十六年六月二日、禁裏御能の節、町人脇指、武士両刀で参上出来たが、京しやむろ染やのうち吉岡又三郎建法（けん）と云うもの剣術に名を得て吉岡流の祖となったが、この日雑色と喧嘩になり、之を切ったため大騒となった話がある。この話をしたのが、同所しやむろ染や吉右衛門と云うもので、よろしき身上没落して、少々歌をよみ、江戸へ下り鴛氷（ヲシヨシン）申也迚、歌の指南なるもの、享保のはじめ我等念比にて有しが、申きかせたる也。此吉右衛門は延宝の比、京に名高き小畠了達甥也。了達もしやむろぞめやにて、つゞみの名人也。此子伝九郎紀州のつゞみうちかと覚候、などとある。

この鴛氷申也は歌人として、真淵が江戸に来る以前には、相応に門人もあったらしく、加藤枝直などはその門人であった。この申也の前身の知られるのも他には記録があるまいと思われる。さて引用が余り長くなったが、本書中には古い所は別として新しい方の年号の出るのは、元文の年号で、他に

も元文五年と云ふ記事が数ヶ所ある。恐らくは、之を去る事余り遠くない時代に本書は草せられたのではないかと一寸想像して見たくなる。其の確認は後日の考証を待つより外はないが、其には柏崎永以其の人の研究にまたねばなるまい。さて古老茶話の伝本は意外に少なく、現在に於いても、無窮会蔵写本三巻より見られぬ様である。依て本書再刊に当っても亦、無窮会蔵写本により批校、その完全を期した。

柏崎永以は北畠氏、名は具元また元珍とも云ったと云う。其の著述に好著の残されているのに、其の人を詳にし得ないのは遺憾である。森銑三氏は永以の『事跡合考』という書なる一文を草して、『事跡合考』の巻首に、「延享三年卯月十二日に書き起すという自序のあるのによって、その著作年代が知られ、その文中の記載によって、著者の柏崎具元が、この時既に七十の老翁だった事が知られる」と記して、次に瀬名貞雄の識語を載せておられる。

「此書は大道寺友山が落穂集抄を継ぎ、柏崎永以源具元が撰著する所也。永以は三郎左衛門が父なり。此書を書掛け、功ならずして没す云々。明和九壬辰八月十一日　瀬名源貞雄」とある。而して本書はまた大田南畝の書写する所となり、伝写本の割合に乏しい本書は京伝や岩本活東子に喜ばれ『近世奇跡考』や『燕石十種』にも収められる事にもなったが、完全の姿の刊本はなかったのである。以上は森銑三著『書物と江戸文化』よりの引用であるが、柏崎永以の略伝を草したものに、通称三郎左衛門とし、歿年を明和九年八月十一日とするのは明かに瀬名貞雄の識語を読み違えた誤記である。貞雄は明かに、『事跡合考』が齢七十の老翁の著述で、功ならずして歿すとしている。明和九壬辰年八月十一日は、貞雄の書写識語である。通称も三郎左衛門は子息の通称であって、永以にも此の称があったかどうか不明である。なお内閣文庫には、『落穂集大全』事跡合考』、『大都事績合考』などが存して居り、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

『古今沿革考』には享保十五年後藤先生序と云う一本が永以の著書として無窮会の井上頼圀図蔵本の中にある。柏崎永以はこれらからゆっくり研究すべき一人物であろう。

## 秉燭譚　五巻

伊藤東涯（いとうがい）著

本書は、著者が幼時父仁斎が門人故旧と談した経史其の他種々の話を追回し、記したもので、其の話は夜の更けるまで続いた。依って秉燭譚と名づけられたことである。今は其の故旧も歿し、昔欠伸をし、其の人々の帰るを待った身も、今は不覚涙の出る事であると著者は云っている。依って其の旧談の耳に残ったのを録し、更に自らの瑣事奇談を附して本書を成した。たゞ経旨の大義は先子の遺書があるから此れには及ばないとしている。以上は享保十四年の自序に云う所である。其の自ら加えた部分と思われるものには、和漢名物の称謂、字義に関するものが多い。全本仮名交り文で、全部で百九十一則ある。当時の漢学者が決して漢学専攻のみでなく、和漢両様に通じて、これを我物としていた事が、この随筆によってもよくわかり、今も亦益を受ける事が多い。本書には、宝暦十三年の伊藤善韶の跋がある。

本書再刊に当っては、内閣文庫蔵版本五冊、青木敦書書写三冊本、後印の二冊本、これには山田業広の「九折堂山田氏図書記」の印記のある本を参照した。本書はこの大成本の外に『日本随筆集』にも収められ流布している。

伊藤長胤については本大成二期第二十四巻「輶軒小録」の解題の所に略記したので、同書を見られたい。

# 四方の硯　三巻

畑鶴山（はたかくざん）著

著者は医家であるが、甚だ趣味に富んだ人で、本の出来もよく、内容もまたよく、近世随筆中の出色のものゝ一つと評されている。先ず本書の序文を見ると、巻頭の「硯田余耕」の文字が大原左金吾、序文が細合方明、斎部孝義、三宅嘯山、伴蒿蹊等の名家揃いである。而して挿画は原在明、田中訥言と、此れだけを見ても著者が如何に当代の趣味人との交流があったかわかろう。其の書名は、巻頭の俊成卿の歌「四方の海硯の水につくすともわがおもふことのかきもやられず」に拠った事である。内容は史上名ある文武の人、及びあるいは無名の畸人隠士などの逸事など、種々の雅談がある。一例を挙げれば、小沢芦庵が冷泉為村に破門された話などは本書によって一般に流布したかと思われる。享和三年に稿は成り、翌年正月に、京都書林　林喜兵衛によって刊行せられた。最後に畑民部著著述目録が挙げてあるが、全部刊行されたか否かは不明とされている。其の末に「彫工寺田治助」とある所を見ると、如何に本書が念入に製作されたかの証となろう。通常は刻者の名などは刊本に見えない。

畑鶴山は、名は維竜（イリユウ）、字は士潜、号は鶴山、鶴巣等とも云った。本姓元木氏、其の先は阿波国の人、後京都に出て畑柳安（コレタツ）の義子となり、柳敬、通称勘解由等と称した。柳安は号黄山、法印で、古方医の大家であった。鶴山は天資温雅、読書を好み、醇儒の評があった。寛延元年十月十七日生れ、文政十年十月八日歿した。享年八十で基西中堂寺に葬ったと、『京都名家墳墓録』に見えている。同書には四方の硯の外に文集若干とほかに『皇朝文林伝』其の他の著書が挙げてあるが、現在存しているか否か不明である。只「粟田日記」三冊写本は存している。ここに其の著に触れて置きたいのは、この書に

は三宅嘯山と伴蒿蹊の序文があり、しかも本書の序文と全く同様の文である、内容は同調の著述であるが、一二、同文の箇所があるが全く別著である。此れには目録もあり、著者の交友の事も見えているので、少々横道にそれるようであるが、著者を知るには便利かと思われるので、其条を抄記して筆を置く。

予若冠銀閣寺に遊び、蘭亭の遊びを楽まんと思ふ。其後三十年を経て今の身となる。天明季年四月二十五日書画会の展翫ありしに、端文仲、三熊海棠にいざなはれて、その会にまかりしに……名刺をとらずして、一時に面識となりし其人々、

赤松滄州　竜草廬　皆川淇園　六如上人　維明禅師　和田寿山　伴蒿蹊　鈴木修敬　荻野元凱

佐々木長秀　永田観鶩　中山禎蔵　円山応挙

とある。而して当時の模様を応挙が筆を執って画く云々とある。

# 目次

古老茶話……一
秉燭譚……二六三
四方の硯……二五九

（解題　丸山季夫）

# 古老茶話

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

# 古老茶話　上

柏崎永以著

一天正十年、甲州御打入之節の記文に有レ之候甲州之郡付、津金、〔割註〕巨摩郡逸見筋、此辺に小笠原氏の出所の小笠原有レ之候。外にも壱ヶ所有レ之候へども、此津金辺の小笠原、誠の小笠原にて候。」曲金、長崎、郡不レ知。柏坂峠、八代郡也。吉田、巨摩郡也。精進（シャウジン）、八代郡。西海（ニシノウミ）、八代郡。役行者、梶が原、仇志（アダシ）、野沢、何茂不レ知。信濃歟。信州境小沼、〔割註〕甲州に不レ知。信州歟。小淵なれば甲州也。」白須、音骨（ワツコツ）、不レ知。信州歟。柏坂の際、勝山、〔割註〕柏坂は八代郡也。勝山は不レ知。」若御子、巨摩郡。恵林寺（エリンジ）、山梨郡。大野筋、山梨郡。鶴瀬、八代郡。初鹿野、山梨郡。苅坂口、〔割註〕不レ知。あしかはロ歟。」屋代、〔割註〕不レ知。八代郡に八代（ヤツシロ）有。」長沢、巨摩郡逸見筋。味坂、八代郡。浅生原（アサフバラ）、巨摩郡。

一片桐市正且元大坂に帰り、市正曲輪の居宅に籠りて登城せず。主従隔意の時、淀殿の所縁ある者、又片桐に縁者なりし朝日玄久といふものゝ方へ、且元家来梅戸忠助来り、於二駿府一且元無レ拠三件の了簡は申たり。全く且元関東へ追従（ツキシヤウ）して申たるものに無レ之候と彼様子を告る。即玄久淀どのへ申て少心ゆる

みたる也。玄久医者列にて常々秀頼の前へ詰るもの也。

一石川土用之介貞政、蒔田八専之介正時　後権佐。

一貞政後伊豆守貞政、大坂にて本丸に登り広言して退くといふ。又一説は、且元を打留よと下知するを、貞政元来且元弟主膳正貞隆と無二の交也。依レ之且元無罪して難に逢ふ。所詮秀頼家無道の至りとて書置して退くといふ。貞政高野に赴く、後御家に出尾張家に被レ附候。元文五、石川隠岐といふ。貞政知行の儀、大野修理、布施屋飛騨守に下知して没収の沙汰せしむ。

一慶長十九十一月三日、大坂御出陣の時、白旗幷引両の幕を尾張中将義直卿に、白旗幷中黒の幕を駿河少将頼宣卿に被レ進候、是より永く彼家に用ひらるゝ。

一同日、里見安房守忠義、伯耆倉吉三万石賜る由被三仰付一候。是は忠義家老、柾木大膳印東采女、駿府に詰て達て訴訟しける故也。

一同十九十一月中、堺の魚問や今井宗薫つねゞ関東の懇意に預り候事故、此度大坂方宗薫が豊饒の高を撿せんとす。宗薫先祖佐々木の末流にて高宮相摸守信綱といふ。此人江州高島郡今井を領し氏を今井に改む。其孫彦右衛門久秀より堺に住し商人となる。至極富祐の人也。武田因幡守仲村入道紹鷗が聟となり茶道に耽る。其子帯刀左衛門久綱剃髪して宗薫といふ。

一佐久間右衛門信盛末は只今の佐久間氏也。

一佐久間玄蕃は、柴田勝家甥といふ一説有ども、慥なる由緒は不レ知也。是は玄蕃死後、無三子孫一一代切

也。

一桑名のわたし何者歟人を切たるに、その切られたる人、切られながら三間計浪をおよぎて行二つに成りたり。依レ之此刀を浪およぎの刀といふ。神君の御手に入、御重宝と被レ成候処、上総介忠輝卿へ被レ進候。然るに忠輝卿、神君薨期に台徳公達而御勘当御免の御願有レ之といへども、不レ叶して伊勢朝熊へ蟄居、其後信濃諏訪家へ御預けの始、せめて是計は随身せられ候へとて、彼浪およぎの刀と相国寺といふ茶入とを、台徳公より御許所持させられ候。後年、忠輝卿被二召遣一候女中に金子助成被レ成度旨にて、松平大和守方へ売払くれられ候様にと彼刀参候を、大和守甥根来了山見申され候。大和守本阿弥を呼び目利いたさせられ候処、信国作代金拾枚計の由申候と也。此事根来了山、木村氏へ直談也。

一忠輝卿諏訪に蟄居の節、始はゆるやかに被二差置一候処、忠輝旧領越前の農人忠輝へ進し申度とて芋を持参いたし候。此事むつかしく成、其農人は死、是より忠輝へ慎急度被レ立候、諸事不自由の御身上のくらし也。

一村上義清は、信州川中島四郡拾弐万石程の領主桂輪の城に住す。景勝代に直江山城守義清をもゑづみ出したる也。御家には子孫且て無レ之、上杉家には有レ之歟。

一信玄の武蔵口の先手八王子に八人有レ之、弐百五十人の歩卒を付置れ候処、神君御代又弐人増し十人と被レ成、歩卒七百五十人御増都合歩卒千人、壱人に百人づゝ御預け、虎皮投鞘の鎧千本御預ケ、小仏口の押へとし給ふ。近年石坂勘兵衛御暇被レ下候以後、九人にて千人の同心御預け也。

一惣じて信玄など高天神或は諏訪原小山等の遠州徳川領の城を取たるとて、全く其地の米穀を収納したるものには非ず、只其城計を取て番兵を入置たる也。高天神も信玄城をば取て番兵は入置たれ共、領米は其所の旧主どもと徳川家へ取たる也。

高天神領主小笠原与八郎長忠与力かけて拾万石の身上也。信玄に降参し信濃へ参り壱万貫文の地、信玄あたへられ候。与力は壱人も信玄へ参不レ属、皆徳川に付て面々の領分を収納し居たる也。其与力といふは与八郎一族の小笠原氏とも過半有。美濃の苗木の城も、信長の領国へ信玄踏込みて苗木の城をとりて秋山伯耆守を入たる迄也。苗木領の米穀は悉く信長納たる也。信玄の上州半国取たなどいふが全く取りたる也。与力ども悉く信玄にしたがひ、其外の領米は信玄へ入たる也。与力とは所々の小地頭の旗頭をたのみ居るをいふ也。惣じて如レ此事よく知るが記録の見様也。此等を習ひとす。是にてよく其実を知る也。

一忠輝は越前越後にて五十五万石ほどの大守也。

一信玄惣人数四万五千ほど也。領分七拾万石余程也。

一塩川伯耆守は始吉太夫とて河内摂津国へかけての領主也。よく国政をとりたり、依レ之信長信仰せられて熟懇也。能勢抔も摂津国丹波へかけての領主也。塩川末且て其子孫無レ之、不レ知、おしむべし。

一石川日向守家成は伯耆守数正とは従弟といへども、慥なる事は無二所見一。とかく日向守家筋にて、伯耆守には所縁なきやう申也。尤家成、数正兄弟といふ説は決して誤也。用ゆべからず。日向守子左衛門大

夫康通也。数正子孫は半三郎とて、当時千石領し有レ之也。高敦いはく、畢竟数正が大坂に退たるは井伊、本多、榊原、出頭甚しき故也。本多は格別、井伊、榊原の若輩のりこえての出頭は、心外也とおもふより、数正退たるもの也。されば石川日向守も、長沢の上野介康忠も、酒井左衛門尉忠次も、右三輩頻りに出頭となりてより、ばた〳〵と引込たり。

一信長美濃の斎藤竜興を打亡されしは、竜興父の道三を殺したり。是より其悪事に依て竜興をたをされし也。然るに其幕下として、遠山の明智を始美濃の国士の中多く、竜興滅亡の時は竜興を見つがずして、信玄美濃を奪んとする時は、入らざる信玄に付て信長を拒む故、信長怒て遠山の明智等攻殺したり。此時光秀が父もともに討殺されし也。是明智光秀が父は遠山の一族也。

一道灌歌たび〳〵忘れ候間おもひ出書レ之、

　　我庵は松原遠く海近し富士の高根を軒端にぞ見る

一吉川惟足神道伝受を願ひ、度々吉田兼従へ参候処、兼従八十に及び対面叶ひがたき時、惟足吉田斎場所の社に参りて、神人に歌をよみ置て、近日参らん此歌を兼従へ見せてたべとて帰りければ、則見せけるに、兼従感じて対面悉く伝受也。其歌、

　　神の道しるべばかりにくれはどりあやしと人の何おもふらん

一天文十二年十月三日、徳川家旧臣参州加茂郡高楊の産、米津小太夫〔割註〕始新次郎。」勝光卒。小太夫政信父也。

一天文十年清野暇打死本多吉左衛門忠豊――平八郎忠高――平八郎忠勝

一天文十四三月、岩松八弥といふもの徳川家の旧臣也。その眼睛なるゆへ片目八弥といふ。此もの先祖の遠忌を行ひ候とて、成道山大樹寺にて法事の酒に沈酔して、広忠卿の御居間に参り、千子村正の刀を以て害し奉らんとす。然れども其刀御股を切る。即逃出る。大手にして植村新六家政に行逢ふ。新六引組み堀に落る。信孝又行逢ひ八弥を放せといふ。新六いふ大切のしとめもの也。我等共につかれよと放しはせぬといふ。とかくして新六八弥を殺す。此八弥日比騒気也。其子御仕置被二仰付一候。然れども岩松は徳川の一族なれば新田の流れをあはれまれて、八弥孫をば御助命有、さりながら武士を退けられて、越前の幸若小八郎が弟子とさせられ舞太夫となり、師匠の苗字と我苗字と一字づゝとりて幸岩与太夫といふ。此者徳川家の旧き事実諸士の由緒をよく知りたるゆへ、後年台徳公の御咄衆の末座に列す。剃髪して真斎といふ。

一天文十四五月五日、内藤三左衛門信成生後豊前守に任ず。是江州坂田郡長浜の城主也。此人島田久左衛門景信二男といへども、実は広忠卿の御落胤といふ。

一天文十五年、長沢上野介政忠子源七郎生。是上野介康忠也、母は広忠卿の御妹也。政忠戦死の後酒井左衛門忠次に嫁す。吉田殿と称す。

一酒井将監忠尚末は弐百俵にて、享保比歟酒井何某といふて御賄奉行勤候処、至極悪意地ものにて、御書物奉行に成て終りたり。忠尚真の心底ならば、三十万石には成るべきほどの事なるにおしき事也。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook